

## 平成29年度に漁獲したセタシジミ親貝の肥育成績

井戸本純一・草野 充・磯田能年（（公財）滋賀県水産振興協会）

### 1. 目的

産卵期のセタシジミ親貝の肥満度低下に対する対策として、繁殖助長のために琵琶湖へ放流する親貝をいったん栄養が豊富な西の湖に垂下し、その肥育効果を検証した。

### 2. 方法

2017年12月22日、2018年2月19日および3月13日の3回に分けて湖北の漁場で漁獲された親貝各200kgを用いた。水通しのよい容器に親貝を4kgずつ収容して西の湖に垂下し、4月20日までの生残状況と肥満度を比較した。一部には、低い収容密度や基質としてアンスラサイトを敷いた試験区を設けた。また、比較のために放流先の琵琶湖（松原試験区）や西の湖以外の水域（水産試験場港湾、赤野井湾）にも垂下した。西の湖に垂下した親貝の半数には両殻に削痕標識を施した。

### 3. 結果

漁獲時の肥満度は、個体差が大きいものの平均では2.2%~2.7%で、漁獲時期にかかわらず大部分の個体が前年度の個体よりも高かった（図1）。垂下後の歩留まりは、前年度の3.9%~22.8%にくらべて75.9%~90.6%と高く、肥満度は約1%分上昇した（図2）。

収容条件を変えた試験区では、収容密度が低い区で肥満度がやや高かったが、基質による効果は認められなかった（図3）。

西の湖以外の水域では、波浪の影響が大きい松原試験区で生残、肥満度ともにやや低かったものの、ほかには西の湖と大きな遜色がなく、当該期間の琵琶湖の餌環境が近年では比較的良好だったことを示した（図4）。

以上の結果から、西の湖における親貝の生残には採捕時の肥満度が一定以上あることが重要であり、その値はおおよそ2%であると考

えられた。また、採捕時期は肥育効果にはほとんど影響しないと考えられた。

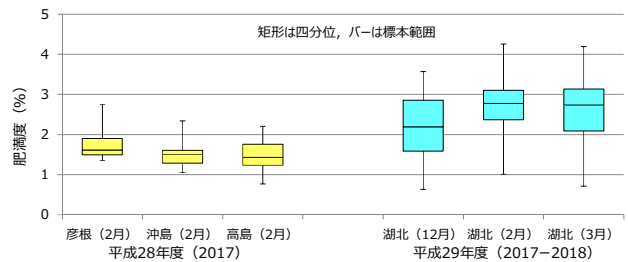


図1 平成29年度と前年度の親貝漁獲時肥満度。

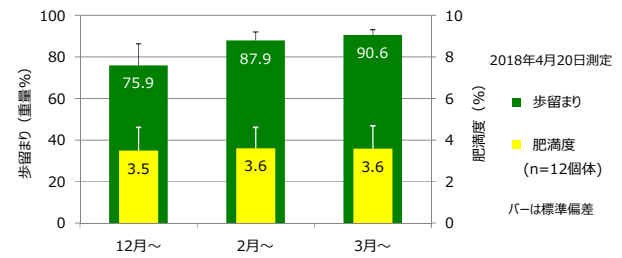


図2 西の湖に垂下した親貝の歩留まりと肥満度。

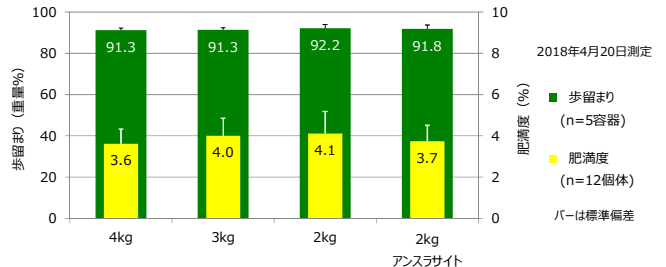


図3 収容密度別および基質を入れた場合の歩留まりと肥満度（3月漁獲貝）。

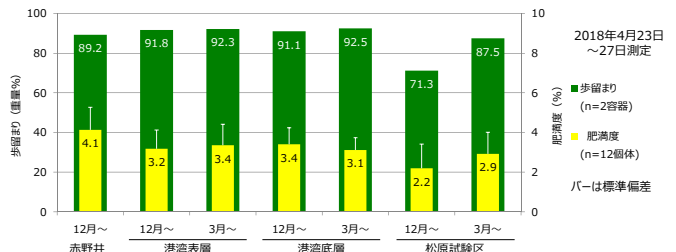


図4 西の湖以外の水域における生残と肥満状況。

肥満度(%) = 貝の中身(軟体部)の乾燥重量 / 貝全体の重量(貝殻および内部の水を含む) × 100

本研究は平成30年度二枚貝資源緊急増殖対策事業(水産庁)を実施する(公財)滋賀県水産振興協会と共同で行った。